

『いのちの未来』創刊に際しまして

カール・ベッカー

京都大学に人間・環境学研究科ができたのは、初代研究科長の竹市明弘先生のお蔭と言っても過言ではないだろう。文学部出身の哲学者である竹市先生は関西大学から京大教養部に戻り、教養部内の研究者を選抜し、さらに、京大文学部で育った小生のような外国人をも専任に採用されるなど、他大学からも研究者を呼び寄せた。そのようにして新しい大学院大学の設立が文科省に提案されたのが、1989年頃のことである。数年の交渉を経て、竹市先生を中心とする創立メンバーと文科省が、文学部の二番煎じではなく、より社会問題に貢献する学科でなければならないという合意に至ったことで、人間・環境学研究科設立は実現された。

お陰様で、本研究科は、国際的に通用する高い研究水準を誇ってきた。ベッカー研究室も例外ではない。本研究室で行われている研究のほとんどは、医療技術をはじめとする現代社会における悩ましい諸問題を、思想的・倫理的な立場から分析し、少しでもより良い世界が築かれることを目指すものである。

そして、それら研究に携わる院生や修了生たちは、日本の各地の大学や病院などで勤めながら、貴重な時間を惜しむことなく、本研究室の紀要『いのちの未来』創刊に向けて、企画や論文執筆、査読などに尽力してくれた。彼らの協力に深謝を申し上げる次第である。また、紀要刊行を自ら実現しようとした院生たちの努力には、頭が下がる思いである。紀要刊行のための作業には、原稿の募集から査読、編集や校正まで、実際にやってみなければ想像もできない山ほどの苦労が潜んでいるからである。『いのちの未来』が、ベッカー研究室の現役院生や修了生の研究への窓口となることを希望すると同時に、編集作業などに携わる院生にとっては、それが研究者の仕事のひとつとして貴重な経験になることを期待したい。

初めての試みが成功したかどうかはわからない。本創刊号について、読者の皆様より忌憚りの無いご意見を頂戴できれば、幸甚に存じる次第である。